



友垣よ

練馬区立石神井西中学校だより
令和六年六月十日 第四(十五)号
校長 井上貴雅

いとをかし：枕草子

例年であれば、梅雨入りしていてもおかしくない時期ですが、今年は少し遅れていますね…。でも、道端には雨が似合う草花があちこちに見られるようにもなってきました。季節は確実に進んでいます。六月は、運動会がありました。生徒たちは、精一杯、全力で取り組み、素晴らしい体験をしました。

さて、突然ですが、今月は「枕草子」について、書いてみたいと思います。中学校でも国語や社会の授業で必ず登場する有名な作品。私も国語の授業で何度も取り上げた作品です。今年の大河ドラマ「光る君へ」を見て感じた、古典を、そして歴史を学ぶということについて考えてみました。

1 春はあけぼの

「をかし」の文学と言われる枕草子。「をかし」とは「趣深い」などと訳されますが、なぜ「素晴らしい」のか、どうして「優れている」のか、単純に見たままに褒めるだけでなく、知的に考え分析した上で発する言葉です。感じたことをただ表すのではなく、どう表現すれば読む者をより感動させられるのか、より喜ばせられるのか冷静に考えて感動を示す言葉：それが「をかし」です。枕草子はこの「をかし」がたくさん使われていることで有名です。

冒頭文「春はあけぼの」はあまりにも有名です。作者の清少納言が四季の彩りや時空間について書いている段で、先日の「光る君へ」では、それぞれの季節が映像で表されています。とても美しく思わず「おおっ」と声が漏れてしまいました。そんな枕草子は、大きく三つの章段に分かれ、作者である清少納言が中宮定子に仕えた生活で感じたこと、生きていく上で考えていること、日々の見聞きした出来事などについて書き留められています。それはいかにも楽しんで、清少納言自身は嫌なこともありながらですが、充実した生活だった様子がかがえる内容です。

2

作者は清少納言(せいしょうなごん)
作者の清少納言は、九六六年頃、平安時代の有名な和歌名人三十六人(三十六歌仙)の一人、清原元輔の娘として生まれました。近しい先祖にも「古今和歌集」に和歌が収録されたこともある人物がおり、歌人の家柄に生まれた清少納言は、自身も皆さんにもお馴染みであろう小倉百人一首に和歌が選ばれるほどでした。

枕草子には、漢詩(中国の有名な詩)のことで周囲の人に賞賛された話なども掲載されており、その才能の豊かさから、当時中宮(天皇の後)であった定子の教育係として仕え始めました。清少納言より一〇歳ほど年下であった定子も教養にあふれた明るい人柄で清少納言を受け入れます。また、清少納言も定子のことを枕草子の中で聡明さや美しさを賞賛しています。そんな生活の中で清少納言の文学的才能も開花していったのだらうと考えられています。

3 これまでの誤解と新たな発見

さて、ここまで書いてきたことは、私も教員になる前から知っていました。明るい性格、そして中宮定子に仕え、様々な経験をしながら楽しい日々を綴っていく清少納言。そんな生活を楽しみながら執筆しているのだらうと思っていました。しかし、今回「光る君へ」を見て、恥ずかしながら、自分の学びが「点」でしかなく、「線」になっていなかったことを思い知りました。「枕草子」の執筆が始まったのは、作品に書かれているような幸せの絶頂期ではなく、定子にとっては父道隆が亡くなり、兄や弟は左遷され、母も病死する：絶頂から転げ落ちた時期であったのです。

枕草子は、センスにあふれ、天真爛漫な清少納言が日々の感じたこと、思ったことを素直に記したものだと思っていました。現実とは全く違ったのです。唯一無二の主人と決めた定子が失意の上に出家した頃に書き始め、清少納言自身にとっても、幸せだった以前のことを思い出して書き進めていたのです。今まで思っていたこととのあまりの違いに愕然としました。なぜ清少納言は「枕草子」を書いたのでしょうか。今まで何十年も「枕草子」、そして清少納言に抱いていたイメージは吹き飛びました。そして今、新たに「をかし」を噛みしめています。ぜひ、これから学習する人も、すでに学習した皆さんにも「枕草子」のいとをかし(なんと素晴らしい!)を感じてほしい：と思いました。